現代のことば

川瀬 慈

高原のチャプリン

遠くから私を呼ぶ声が聴こえる。呪文とも、唸りともつかない歌声。エチオピア高原の町から町へと、分厚く白い布をかぶった青年が旅をしている。彼の足取りは快活だ。太陽がまだ昇る前、訪れた町の家々の戸を叩いて歌う。青年の名はテラフンといった。

不思議な歌声だった。いにしえとも未来とも判別のつかない世界に聴き手を誘いこむ。テラフンは複数の民族の言葉で歌うことができたし、彼の声にはまた、空間をじわじわと支配していくような独特の力強さがあった。その歌声に憑かれてしまったのだろうか、私はある時期彼を追いかけるように旅をし、家から家、町から町へと共に渡り歩いた。

ラリベロッチ（単数ではラリベラ、あるいはハミナ）と呼ばれる吟遊詩人は、単独で、あるいは男女のペアで、エチオピアを広範に移動し、早朝に家の軒先で歌い、乞い、金や食物を受け取ると、その見返りとして人々に祝詞を与える。

テラフンはラリベロッチの家に生まれた。ラリベロッチの起源伝承は複数あるが、その一つにこんな話がある。神が世界を創造したとき、そこへ組み込まれるはずであったラリベロッチの先祖は、たまたま食事をするため外出していた。遅れてやってきた彼に対して神は大いに怒った。彼の子孫は、歌い乞い続けなければ、体中の皮膚が腐る病に侵される宿命を負ったのだという。

「蜜のように麗しく湖のように心がひろいあなた／さあ私にしっかり目をむけて／宝石のように美しいあなた／隣人からの尊敬と多くの子牛の恵みをあなたに／ほらどうぞ、と言って与えて私の幸運を証明して／ほらどうぞ、と与えて私の豊かさを証明して／われわれは神のはからいで会うことができた／死が別たないかぎり、我々はまた巡りあうであろう」

テラフンの歌声が薄明の高原の冷気を震わせ広がっていく。彼が携えるビニール袋には、戸口で受け取ったインジェラ（エチオピアの主食）が投げ込まれる。早朝から大声で歌い乞う彼のことを疎んじる者、蔑む者は少なくない。住民たちから罵倒の言葉を浴びせられ、まるで野良犬のように扱われることだってある。そんな時、一緒になって気落ちした私を気遣ってか、テラフンはきまって「チャーリー・チャプリン」と言って、チャプリンのコミカルな歩行を模倣し、ピョンと跳びはねてみせる。彼は昼になると歌い歩く活動を切り上げる。ジーンズとTシャツに着替え、蜂蜜酒を飲みに酒場に繰り出す。

テラフンには夢があった。それは、ラリベロッチとしての活動を止めて、バンドを従えて歌い、ポピュラーミュージックの世界で活躍すること。夢を語った次の日の朝、神の呪縛から解かれることを夢見るエチオピア高原のチャプリンは、神の祝福を人々に伝えるべく、また家々を訪ね歌い歩く。

「蜜のように麗しいあなた／神があなたに祝福を与えますように／幸も、不幸もあふれる世界／神があなたの空しさを埋め／職場から家まで安全に帰し／人々の悪意から遠ざけ／愛で包みますように」

（国立民族学博物館助教、映像人類学・アフリカ研究）